ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples

能取岬西岸遺跡遠景

北方民族博物館だより
ー第24号ー

第11回北方民族文化シンポジウム 2
講演会 5
「モヨロ貝塚とオホーツク文化解明の道のり」
能取岬西岸遺跡の調査
News 6

第11回北方民族文化シンポジウム「開発と北方諸民族」

平成８年10月３日、４日

（財）北方文化振興協会等が主催する第11回北方民族文化シンポジウムは「開発と北方諸民族」をテーマに、平成８年10月３日（木）、４日（金）の両日にわたり網走市内で開催されました。

今回のシンポジウムは、北方諸民族が文化接触以来、外部から受けてきたさまざまな影響を「開発」ととらえ、地域や民族の社会における文化的、経済的影響にともなう文化変容の在り方に焦点をあてています。基調講演につづく第１部ではさまざまな「開発」と民族文化の関係を、第２部では伝統的な地域／民族の文化の代表的事例として捕鯨をとりあげ、捕鯨をめぐる国際的規制と地域の経済、文化の関係について検討しました。

井上紘一（北海道大学）、岡田淳子（北海道東海大学）、岡田宏明（当館館長）の各氏に座長を、また、スチュアート　ヘンリ（昭和女子大学）、ワレス・クレメント（北海学園大学客員教授）、野本正博（元アイヌ民族博物館伝承課長）の各氏にコメンテーターをつとめていただきました。さらに捕鯨の今日的課題について、三崎滋子（財団法人日本鯨類研究所）、大橋貴則（水産庁）の各氏にコメントをいただきました。

以下に、国内外から参加された７名の発表者の要旨を報告します。

＜基調講演＞

ディビッド・Ｅ・ヤング
（カナダ・アルバータ大学）

「カナダ・アルバータ州における北方開発のパラドクス」

ヤング教授は先住民に対する北方開発の影響を分析すると多くのパラドクスがみられるといい、それらのパラドクスをカナダ・アルバータ州北部の調査から示しています。そして、現代社会における先住民社会を支えるものとして、伝統的な知識、価値観、社会に基づく活力ある先住民共同体

こそが求められていると強調されました。

カナダ・アルバータ州北部の北方針葉樹林帯に居住する人口5,500人、主にクリーとメティス（ヨーロッパ系人とインディアンを祖先とする混血の人びと）からなる地域の近年の調査から、「開発は悪い結果をもたらす」とするステレオタイプな見方が通用しない現実がわかった。狩猟採集経済から森林・石油・ガスの開発会社への経済的依存にともない、多くの北方先住民社会が直面しているような問題がこの地でも生じてきた。外部の研究者からみると、先住民社会の伝統文化に影響を与える要因として、外的側面では木材伐採会社の存在と、内面的にはペンテコステ派などのキリスト教の布教活動をあげることができる。ところが、彼らの直面している外的、内的問題のリストにはこれらの要因は含まれていなかった。

これらを分析すると、外的影響力を与える木材会社のような資源収奪型産業も、あるいは精神的影響力としてのキリスト教についても、先住民の伝統文化に否定的な側面だけではないことがあきらかになった。「開発」は白か黒かの見方でとらえることはできないのである。なによりも、伝統的な知識、価値観、社会に基づいた先住民の共同体は活力をもち、そうでない場合は、しばしばみられるアルコール中毒や怠惰な性向、健康障害などが顕著になる。近年の資源収奪型会社は地域の自然や社会に対するさまざまな配慮を行うようになり、経営にも先住民をある程度参画させてい

る。また、ペンテコステ派の布教も先住民の伝統的精神世界を消し去るものではなく、シャマニズムに代わって先住民の精神的安定に寄与する部分も否定できないのである。

＜第１部＞「開発と北方諸民族」

池田　透　（北海道大学）

「サハ共和国エヴェノ・ブイタンタイスキー地区における狩猟活動」

トナカイ遊牧民における狩猟活動の変容の事例がとりあげられた。ロシア連邦サハ共和国の北部、北極圏内に位置するエヴェノ・ブイタンタイスキー地区は人口約3,000人の内、ヤクートが60%、エヴェンが35%を占め、生業ではヤクートの牛・馬牧畜、エヴェンのトナカイ遊牧が中心である。シベリアにおける毛皮獣狩猟はロシア革命以後も世界市場に向けた産業であったが、ソビエト連邦崩壊後、世界的な毛皮需要の低迷、自由主義経済への移行による国外からの毛皮の流入などで、毛皮獣狩猟は経済的価値を失ってしまった。

同地区ではトナカイ遊牧と密接な関係をもって狩猟が行なわれてきたが、現在では専門的狩猟者はなく、年金生活者やトナカイ遊牧者による有害獣駆除の側面をもつ野生トナカイの狩猟、肉用獣狩猟としてのシベリアビッグホーンの狩猟、毛皮獣のワナ猟が行なわれている。経済的混乱による現金収入の減少・不確実性のある状況のもとで、自家消費用の大型獣狩猟は食料獲得の意義をもち、文化接触以前の状況に戻ってしまったともいえる。年金生活者による余暇的小型毛皮獣狩猟も含め、今後もトナカイ遊牧の余暇的部分としての伝統的な狩猟は受け継がれてゆくことも予想される。

アルフレッド・Ｆ・マイェヴィッチ

（ポーランド・アダム・ミツキェヴィッチ大学）

「開発とその代価ー北方少数民族文化経済発達の見込みと限界ー」

「開発」にさらされる民族社会の現状への警告と消滅しようとする文化を維持・保存する方策がとりあげられた。インド・ボパールのユニオン・カーバイド社の化学工場の事故、旧ソ連のセミパラチンスクの核開発汚染、ビキニ環礁の核実験汚染、中央アジアの灌漑（かんがい）事業などを例に、進歩や開発に大きな代価を払わなければならなかった現実を指摘した。そして、言語を中心とする少数民族の文化の消滅を食い止める手段が提唱された。

津曲　敏郎　（小樽商科大学）

「近代化と言語変容：ツングースの事例から」

中国大興安嶺のエウェンク（エヴェンキ）、ロシア沿海州のウデヘの調査から、近代化にともなう言語の変容、とくに話者の集団の大きい言語が、少数民族の言語に与える影響について報告された。言語の保持には言語集団の密集度、孤立度、伝統的な文化の保持が関係している。借用語が増えるにしたがって、音韻の影響も受ける。そして、90%の言語が今後百年の内に消滅するという予測があるなかで、言語の保持はとにかく子どもに伝えていくことであるが、子どもたちは学校で

大言語を習得し、少数民族の言語は失われる現状にある。

＜第２部＞「捕鯨をめぐる国際規制と
地域の経済・文化」

ダン・グッドマン
（カナダ連邦政府海洋漁業省）
「イヌイト諸権利補償請求協定と
カナダ極北圏の捕鯨管理」

カナダ先住民の捕鯨再開への取組と海洋法や捕鯨規制に対するカナダ政府の見解が報告された。たとえば、東部極北圏の先住民諸権利補償請求に基づき最も新しく調印されたヌナブート協定には海洋哺乳（ほにゅう）動物資源の管理と捕獲に関する条項が含まれ、イヌイトおよびカナダ政府の共同管理組織がある。共同管理組織は生物の保護を基本としながらも、伝統的な先住民文化が維持・継承される立場からホッキョククジラの捕鯨再開を求め、近年になって各１頭の捕獲がカナダ政府によって認められた。これらの捕鯨再開に対しＩＷＣ（国際捕鯨委員会）はカナダの再加盟（1982年に脱退）を求めるとともにＩＷＣが規制するいかなる捕鯨も認めていない。これに対するカナダ政府の見解は興味深い。カナダはＩＷＣ脱退後も、オブザーバーの立場で代表団を派遣し、クジラ類資源調査を通じてＩＷＣ科学小委員会などの資源管理に協力している。国際海洋法の解釈からも、クジラ類の保護、管理、調査を実行する上で必ずしもＩＷＣに加盟する必要はないし、それらを行う組織がＩＷＣだけをさすのではないと解釈できる。つまり、資源保護についても十分な貢献を行ってきており、現在カナダが行っているホッキョククジラの捕鯨は国際法のなかでも合法的である。

岩崎・グッドマン　まさみ
（北星学園女子短期大学）
「北部ノルウェーにおける小型捕鯨業について」

ノルウェーは現在ＩＷＣの捕鯨カテゴリーで商業捕鯨とされ、全面禁止（モラトリアム）されている。

ミンククジラを対象とした小型捕鯨を行っている。ノルウェー政府は日本などとともに、ＩＷＣのモラトリアム決定に対し異議申し立てを行ったが（日本はその後異議申し立てを取り下げた）、1988年に一時ミンククジラ猟を禁止した。その後、捕鯨地域の経済的打撃や捕鯨やクジラの加工・流通に関する知識、技術、組織が失われることなどを考慮し、1993年から捕鯨を再開した。北部ノルウェーの小型捕鯨の歴史、社会・文化的側面、さらに捕鯨再開後の現状を調査、分析した結果、小型捕鯨は地域の経済、文化に欠かすことのできないものと位置づけることができる。

下道　吉一　（下道水産）
「捕鯨の再生をかけて」

小型捕鯨業者として、また地域の経済、文化にとって必要な要素として、ミンククジラの地域沿岸における捕獲再開を訴えたい。網走における捕鯨業の歴史から、商業捕鯨モラトリアム以前・以後の沿岸小型捕鯨、また、これらＩＷＣの決定に対する日本政府の捕鯨政策など、日本の沿岸捕鯨の歴史を振り返る。さらに、すでに資源的に問題のないミンククジラの一定数の捕獲は持続的資源利用として可能であることを示し、伝統的な食文化の継承、伝統的な地域の産業として日本の沿岸小型捕鯨は「先住民生存捕鯨」でもなく、「商業捕鯨」でもない第三のカテゴリーに含まれる「捕鯨」として再開を求める。

（学芸課　渡部裕）

「モヨロ貝塚とオホーツク文化解明の道のり」　平成８年11月３日

講師：筑波大学助教授
前田　潮　氏

大学生のとき遺跡調査に参加したことがオホーツク文化研究に関わっていくきっかけとなったという講師に、戦後の調査から半世紀を経たモヨロ貝塚・オホーツク文化を巡るお話しをいただきました。以下は要旨です。

オホーツク文化であるが、縄文・弥生文化などに比べるとこの日本での知名度は格段に低い。義務教育や高校の歴史の教科書に紹介される機会が、極めて少ないからということが反映している。オホーツク海という広大な海の縁辺にオホーツク文化は形成されてきたのだが、日本の中央から見れば列島の外れに起こった小さな歴史事象としてしか考えられてこなかったという「中央中心的な歴史観」や、農耕文化主体の日本人の意識では、狩猟民の実際の生活を考えることができにくいといったことなどもこれには影響しているのだろう。

オホーツク文化は技術的に高度に発達した狩猟民文化である。狩猟ということでは、旧石器時代人も同様の文化である。しかし、オホーツク文化には金属器が伴うこと、また周辺には古代国家があったということで旧石器の時代とは確実に違うのである。周辺国家とオホーツク文化の社会とは確実にモノと人の交流があった。

オホーツク文化の研究は、明治11年英国人ジョン・ミルンが根室の弁天島で発掘したことから始まる。網走のモヨロ貝塚は、明治20年頃から学界に知られるようになり、昭和の初期には外国にも知れ渡るようになった。特に第二次世界大戦中の調査では、200体をこえる人骨が出土し、オホーツク文化社会の大きさを知る資料となり、この資料から提起されたオホーツク文化人のアリュート説は有名である。戦後、静岡県の登呂遺跡と並行した時期におこなわれたモヨロ貝塚の発掘調査は、ただ単に遺物を掘り出しただけではなく、それ以降の研究の基礎を築いた数々のデータを提供した。

アリュート説が支持されることが少なくなった現在、大陸文化とオホーツク文化の系譜が注目されている。中国・ロシアでの研究の蓄積から、靺鞨文化、同仁文化と呼ばれているアムール川流域の古代文化が、オホーツク文化と類似することがいわれている。この類似は出土品である青銅製帯飾り、土器に代表されるが、非常に良く似ていることからオホーツク文化人が大陸から渡って来たという説もある。近年これを補強するように形質人類学の立場から、アムール川流域のウリチ民族の骨格と似ているという説がだされている。私はモノの類似は確かにあると思うが、古いものと新しいものを直接的に比較することに疑問を感じる。

オホーツク文化の研究ではその始まりが問題にされている。私が携わったサハリン島ウスチ・アインスコエ遺跡の竪穴調査では、古い時期の特徴をもった土器を伴い、しかもオホーツク文化の特徴を備えた竪穴を発見した。このような事例を通して、これまで位置づけがはっきりしていなかったオホーツク文化の流れが明確にたどれるようになるだろう。

能取岬西岸遺跡の調査

当館では平成８年度の調査として、６月から７月にかけて網走市内能取岬の能取岬西岸遺跡を調査しました。この遺跡はすでに知られており、オホーツク文化の刻文土器を出土する竪穴の存在が崖面の観察からもわかります。

今回の調査は試掘を伴う分布調査で、遺跡の広がりと土中の状況を確認することが主な目的でした。調査の結果から遺跡の広がりは極めて限られた範囲であること、しかもその範囲に竪穴が重複していることもとらえることが出来ました。

（学芸課　青柳文吉）

News

企画展　作ってみよう入ってみよう「きたのすまい」

1997年２月４日（火）～３月16日（日）

会場：当博物館特別展示室

観覧は無料です

サミのテントをはじめ、イヌイトのイグルー（雪の家）模型、モンゴルのテント（ゲル）模型などを展示し、北方民族のすまいにみられる寒さに対する工夫や生業との関わりを紹介します。

開催期間中、博物館クラブ（小中学生対象）では、１月25日（土）に屋外でイグルー作りに挑戦し、２月８日（土）にはペーパークラフトで「きたのすまい」を作ります。

寄贈資料紹介

○衣服ほか

札幌市の津曲敏郎氏から、ウイルタの衣服１点、エヴェンキの口琴１点、エヴェンキの白樺樹皮製容器１点が寄贈されました。

○手袋ほか

札幌市の谷本一之氏から、コリヤークの手袋１点、たばこ入れ１点、ナイフ付きベルト１点、熊胆１点が寄贈されました。

○衣服

ロシア・サハリン州ポロナイスク市のＡ．Ｐ．オリホビック氏からニブフの衣服１点が寄贈されました。

○衣服

東京都の黒田矢須子氏からウイルタの衣服１点が寄贈されました。

執筆者ならびに出版社から贈呈をうけた書籍（10月～12月）

大林太良　1996
『海の道　海の民』小学館

金関丈夫著　大林太良編　1996
『木馬と石牛』岩波書店

平林ミツエ、戸部千春　1996
『ウチャシクマ、語り継ぐ我がウタリ』研究会いたやかえで

渡辺仁ほか　1996　『平成７年度　アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査15）』北海道教育委員会

Majewicz, Alfred F. et al. eds. 1992
Linguistic and Oriental Studies from Poznan 1. Adam Mickiewicz University.

Majewicz, Alfred F. et al. eds. 1995
Linguistic and Oriental Studies from Poznan 2. Adam Mickiewicz University.

Young, David et al. 1989 *Cry of the Eagle : Encounters with a Cree Healer.* University of Toronto Press.

主な来館者

10月２日　天理大学付属天理参考館
館長　山添理一氏
副館長　近江昌司氏ほか

10月19日　中国黒龍江省文物管理委員会研究者・中国黒龍江省文物考古研究所　李陳奇氏、北方文物雑誌社研究館員　王徳厚氏

11月８日　吉林省社会科学院歴史研究所研究員　楊暘氏

その他の行事

10月12日　博物館クラブ
「北方民族の楽器づくり」

11月９日　博物館クラブ
「１日博物館体験」

12月８日　講習会「モカシンづくり」

12月14日　博物館クラブ
「北方民族の文様でつくる年賀状」

12月27日　「ロビーコンサート'96
青少年のための室内楽の夕べ」
演奏：札幌交響楽団員

観覧者動向　10月～12月

	常設展示
10月	3,138名
11月	844名
12月	372名

職員の異動

◇退職（12月31日付）
学芸員　佐々木　亨
（東北大学東北アジア研究センター助教授へ）

◇新採用（１月１日付）
学芸員　中田　篤

北方民族博物館だより
— 第　24　号 —
1997年１月25日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093　北海道網走市字潮見313-1
ＴＥＬ　0152-45-3888　ＦＡＸ　0152-45-3889